

## コリント人への手紙第一 第13章 1節

「たとい、私が人の異言や、御使いの異言を話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」

凍てつく朝、大輪の薔薇の花一輪の一点が輝く。厳寒の夜、凍りつくような月下のもとを過ごしてきた花。その陰しさと大輪の重みに少し頭を垂れるかのような姿で一滴からの輝きを見せている。この時、この場所にしか起こらない輝きがある。厳かな輝きである。花弁についた水が夜に氷となり朝の陽光に照らされ再び水滴となり、その水玉が輝き始めた。短い時の流れの中で自然のドラマが繰り返されている。花と水滴。水滴と氷。氷と陽光。水滴と陽光と花弁、それらが一つとなって繰り返される朝のドラマが輝き始まる。

愛がないなら、本来楽しめるべき音が騒音、雑音にしか聞こえない。愛がないなら、いかなる言葉、たとえそれが天上から贈られた言葉であってもうるさい言葉にしかならない。うるさいだけではなく、何の値打も無く、何の役にもたたない、不自由な言葉となる。

たとい、凍てつく夜を過ごすような険しい道を歩むことがあっても、たとい、一瞬凍りつくことがあっても、たとい、重荷のあまり頭を垂れることがあっても、陽光が射せば、指し来る光で輝き始まる。愛が注がれればいのち輝く。

2022年1月21日